

乳幼児を持つ親の子育て観尺度開発

—保育者が子育て支援を行う視点から—

ヤマシロ ヒサヤ
山城 久弥*

目的 近年、家族構造や社会経済状況の変化などにより、児童とその家庭を取り巻く環境は厳しい状況となっている。そうした中、地域の保育所をはじめとした保育士の子育て支援機能が重要視されている。そこで、本研究では保育者が子育て支援を行う視点から、「喜びや楽しみ」「悩みや不安」「責任感」の3つの下位概念に着目しながら、乳幼児を持つ親の「子育て観尺度」を開発することを目的とした。

方法 先行研究から、子育て観に関する27項目の質問項目を採用し、保育所を利用している乳幼児を持つ5,460名の保護者を対象に郵送留置調査法を実施し、回収数は2,060名（回収率37.7%）であった。その中から、親（母親か父親）で年齢や子育て観に関する質問項目にすべて回答している1,680名を分析対象者とした。分析方法として、子育て観を尺度の項目に対し探索的因子分析を行った。信頼性については、内的整合性（Cronbachの α 係数）を算出した。

結果 「子育て観尺度」は、因子分析の結果から「子育てに対する負担」「子育てによる自身の成長の楽しみや喜び」「親としての責任感」の3つの下位尺度から構成された。各下位尺度の α 係数は0.66~0.81であり、3因子構造が示された。さらに、3つの下位尺度を構成する項目が同一因子に0.4以上の因子負荷量を有し、構成概念の妥当性のある程度確保していることも示唆された。

結論 乳幼児を持つ親の「子育て観」を把握するための尺度として、「価値」と「態度」を網羅した概念で構成され、ある程度の信頼性と妥当性が確認された。今後の課題としては、尺度の改良を重ね、さらなる信頼性と妥当性の確保や実際の保育現場で活用されるよう尺度の短縮版が必要となるだろう。

キーワード 子育て観、乳幼児を持つ親、保育者、子育て支援

I 緒 言

(1) はじめに

近年、児童を取り巻く社会環境には、人口の都市集中、公害、交通事故などの問題が生じている。また、核家族化と女性就労の増加などによって、家族生活にも様々な問題が生じており、これら問題に対応していくことが児童家庭福祉における最重要課題となっている¹⁾。

こうした課題に対し国は、エンゼルプランや次世代育成支援対策推進法、少子化社会対策基本法²⁾などにより、保育サービスなどの家庭支援や保護者の働き方を見直すことで、子どもが健やかに育ち、または、保護者自身が子どもを育てることに喜びを感じることができるよう、その環境整備に努めてきた。しかし、保育所への入所待機児童や年々増加する児童虐待相談など、児童やその家庭を取り巻く環境は依然厳しい状況となっており、今後も子育て支援の質・量ともに一層の充実を図ることが急務な課題で

* 沖縄福祉保育専門学校専任教員

あることに変わりはない。

こうした子育て支援を中心的に担う職種として保育士があげられる。保育士は、児童福祉法において、児童に対する保育のみでなく、保護者に対する保育指導を行うことが明記されており、家庭全体を視野に入れて支援することが求められている。また、小川³⁾は、保育者の役割について、①親の子育ての相談に応じその不安の軽減を目指すこと、②親が楽しく子どもを育てる責任と喜びを味わえることを公共施設の子育て支援として、その専門性について説明している。実際に、保育所や幼稚園における保育者の子育て支援に関する実践において、保護者自身の成長や育児力の獲得、育児不安の解消につながっていることなどが報告されている⁴⁾⁻⁷⁾。つまり、保育士は子どもの保育だけではなく、親が普段子育てを実践していく中で、親自身の成長や子育てに対して喜びが感じられ、悩みや不安については軽減していくこと。そして、親が自信をもって親の役割を果たしていけるような関わりが求められているのである⁸⁾。

このように、保育士は子育て支援を実践していくうえで、乳幼児の子どもを持つ親の子育てに対する想いや考えなど、いわば子育て観を把握し支援していくことが必要であるが、実際の保育現場において、そうしたアセスメントがしっかりできていないのが現状ではないだろうか。北濱⁹⁾は、保育者に対して子育て支援に関する意識調査を実施し、保護者に対する子育て支援に関して何をどのように進めていけばいいのかということについて疑問や葛藤があることを報告している。このことは、支援を展開していくうえでの親の子育てに対するアセスメン

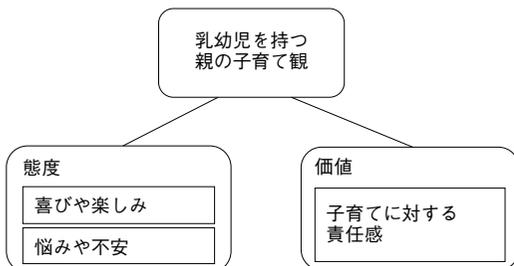
トや事前評価（事後評価）がしっかりできていないために、確実なニーズを明らかにすることができずにいることが理由として考えられる。そこで、まず、本研究では、先行研究における子育て観尺度で用いられている子育て観の概念を整理しながら、本研究における子育て観を操作的に定義していくこととする。

(2) 子育て観の概念規定 (図1)

心理学の領域において価値や態度は、人間の意思決定や行動に影響を与える要因として注目されてきた。Rokeach¹⁰⁾の定義によると、価値は「ある特定の行為様式や結末を、他に比べて個人的あるいは社会的に好ましいものとする、個人の一定した信念」としている。そして、複数の価値を階層的または総体的な優先関係をもとに体系化したものを価値観あるいは価値体系と呼んでいる。一方、態度についてAllport¹¹⁾は、「経験を通じて体制化された心理的あるいは神経生理的な準備状態であって、人が関わりをもつ対象に対する、その人自身の行動を方向づけたり変化させたりするもの」としている。また、大山¹²⁾は「特定の対象や行為、社会事象に対する好意的あるいは非好意的な評価、感情、行動についての先有傾向」としている。どちらも、個人が社会との様々な経験やつながりを通して獲得していく点では同じであるが、価値と態度は、次のような点で区別されている。態度は、特定の対象に対して形成されるものであるのに対し、価値は事物や状況を超えて一定して存在する信念である。さらに、価値は態度より個人の認知体系や人格形成において中心的な位置を占めていると考えられている¹³⁾。

こうした価値や態度の概念から先行研究における子育て観の定義を整理すると、陳¹⁴⁾は「子育てに対する個人の価値観や見解」としており、個人の子育てに対する考えや印象といった「価値」に重点を置いている。内藤¹⁵⁾は、「育児は楽しいが疲れる、充実感があるがわずらわしい」といった実際の子育てに対する評価を中心に、子どもが好きであるかどうかや子育てをすることで得られる社会との関

図1 子育て観を構成する下位概念



わりを含めた概念で構成しており、「態度」に重点を置いている。これら先行研究の概念に対し、本研究では、「価値」と「態度」の両面を有する子育て観を設定することが重要であると考へ、子育て観を「実際の子育てに対する評価としての態度や子育てに対する個人の価値観」として操作的に定義した。そこで、本研究では、保育士が親を対象に子育て支援を行う視点から、乳幼児を持つ親の「価値」と「態度」に焦点をあてた子育て観尺度の開発を研究目的とした。具体的には、子育てに対する「喜びや楽しみ」「悩みや不安」「責任感」の3つの下位概念に着目しながら信頼性と妥当性の検討を行った。

Ⅱ 方 法

(1) 「子育て観尺度」の項目の選定

本研究における子育て観としての「喜びや楽しみ」「悩みや不安」「責任感」の3つの下位概念に対する質問項目については、先行研究において開発された子育て観尺度¹⁴⁾¹⁵⁾や育児幸福尺度¹⁶⁾¹⁷⁾、育児ストレス尺度¹⁸⁾¹⁹⁾、内閣府による社会意識に関する世論調査²⁰⁾の質問項目から27項目を採用し、表現に若干の変更を加え作成した。それぞれの質問項目への回答は、「ほとんどそう思わない」「ややそう思わない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の4件法で評価した。

表1 分析対象者の概要

	全体 (n=1,680)	母親 (n=1,092)	父親 (n=588)
年齢(歳)(n=1,680)	34.3±5.6	33.8±5.2	35.4±6.0
世帯構成(名)(n=1,662)			
ひとり親世帯	80(4.8)	66(6.0)	14(2.4)
夫婦と子どものみ世帯	1387(82.6)	883(80.9)	504(85.7)
その他の世帯	195(11.6)	133(12.2)	62(10.5)
子どもの数(名)(n=1,678)	2.3±1.0	2.3±1.0	2.3±1.0
第1子の年齢(歳)(n=1,671)	6.5±4.4	6.5±4.5	6.3±4.2
暮らし向き(名)(n=1,626)			
とても苦しい	89(5.4)	52(4.8)	37(6.4)
どちらかという苦しい	772(46.7)	501(46.6)	271(46.9)
まあゆとりがある方だと思ふ	726(43.9)	482(44.9)	244(42.2)
かなりゆとりがある	39(2.4)	24(2.2)	15(2.6)
教育年数(年)(n=1,672)	13.4±1.9	13.4±1.8	13.5±2.1

注 連続量については平均値と標準偏差を、離散量については度数と割合(()内%)を示した。

(2) 調査対象と調査方法

本研究は、沖縄県私立保育園連盟に加盟している保育園を調査対象とし、それら6ブロック(北部地区、中北部地区、中南部地区、那覇地区、南部地区、先島地区)の中からそれぞれ5園(計30園)を抽出し、5,460名の保護者を対象にした。それら対象となる保育園に質問紙を郵送し、記入後質問紙を郵送してもらおう郵送留置調査法を行った。

調査期間は、2012年12月11日～2013年1月15日にかけて実施し、回収数は2,060名(回収率37.7%)であった。回収されたサンプルの中から、親(母親か父親)で年齢や子育て観に関する質問項目にすべて回答している1,680名を本研究の分析対象者(表1)とした。

(3) 分析方法

分析方法として、子育て観を尺度の項目に対し探索的因子分析を行った。信頼性については、内的整合性(Cronbachの α 係数)を算出した。なお、本研究の分析には、統計パッケージソフトSPSS(Ver22.0)を使用した。

(4) 倫理的配慮

倫理的な配慮としては、「乳幼児の子を持つ親の子育て観に関する調査」として、今後の福祉人材の育成を考える際の基礎資料を得ることを目的としており、また、調査内容についてはすべて統計的な数値として取りまとめ、目的以外に使用することはないことを事前に書面で説明し、調査への理解を得られた保護者より自記式無記名で回答してもらった。

Ⅲ 結 果

(1) 探索的因子分析の結果(表2)

まず、子育て観に関する27項目の度数分布を確認し、いくつかの項目で偏りがみられたが、いずれの項目も親の子育て観を把握する上で重要な内容が含まれていると判断し、すべての項目

を分析の対象とした。

表2 子育て観尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

次に、子育て観に関する27項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化 (5.34, 3.40, 1.58, 1.21, 1.08, 1.01, …) と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷が0.40を基準に設定し、それを満たさなかった項目や複数の因子にまたがって因子負荷を示した6項目を削除していき、21項目に対して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転前(抽出後)の3因子で21項目の全分散を説明する割合は43%であった。

第1因子は9項目で構成されており、「子育てをすると自分の息抜きする時間が持てない」「子育てによる身体の疲れが大きい」などを表す項目が高い負荷量を示していたことから「子育てに対する負担」とした。第2因子は8項目で構成されており、「子育てをすることで、自分の物事に対する見方など視野が広がる」「子育てをすることで自分自身も成長させてもらっていると感じる」などを表す項目が高い負荷量を示していたことから「子育てによる自身の成長の楽しみや喜び」とした。第3因子は4項目で構成されており、「親は子ども中心の生活をすべきである」「子どもが良くも悪くも育つのはすべて親の努力にかかっている」などを表す項目が高い負荷量を示していたことから「親としての責任感」とした。

	I	II	III
1 子育てに対する負担			
子育てをすると自分の息抜きする時間が持てない	0.69	0.01	-0.02
子育てによる身体の疲れが大きい	0.68	-0.01	-0.09
子育てのために、自分のやりたいことができない	0.66	-0.06	0.06
子育てによる精神的疲れが大きい	0.61	0.13	-0.04
子育てをしていると仕事が十分にできないことが多い	0.58	-0.08	0.05
子どもを連れて外出するのは大変なことである	0.53	-0.01	0.05
子育て中は社会から取り残されるような不安がある	0.49	-0.06	0.05
子育ては経済的な負担が大きい	0.43	-0.02	-0.04
子育てに辛さを感じる時のほうが多い	0.43	0.13	0.00
2 子育てによる自身の成長の楽しみや喜び			
子育てをすることで、自分の物事に対する見方など視野が広がる	-0.01	0.70	-0.12
子育てをすることで自分自身も成長させてもらっていると感じる	-0.07	0.69	-0.09
子どもがいることで、毎日の生活に張り合いが出る	0.04	0.63	0.03
子どもの笑顔や寝顔、しぐさなどを見て喜びを感じる	-0.03	0.53	-0.08
子どもに生きる勇気をもたらしている	-0.05	0.52	0.16
子どもと一緒にいるだけで幸せだ	0.07	0.49	0.09
子どもそのものが希望である	0.02	0.49	0.20
子どもを通して新たな人とのつながりができる	0.04	0.40	-0.02
3 親としての責任感			
親は子ども中心の生活をすべきである	-0.06	0.01	0.67
子どもが良くも悪くも育つのはすべて親の努力にかかっている	0.03	-0.08	0.59
親は子どものためなら自分のやりたいことなどは後回しにしてしまうものだ	-0.01	-0.01	0.59
親は子育てに全ての責任がある	0.06	0.07	0.43
因子間相関	I	II	III
I	-	0.20	0.03
II		-	0.50
III			-

表3 下位尺度の記述統計量とα係数

	平均値	標準偏差	α係数
子育てに対する負担	25.2	5.0	0.81
子育てによる自身の成長の楽しみや喜び	29.3	2.9	0.79
親としての責任感	13.0	2.0	0.66

(2) 内的整合性の検討 (表3)

内的整合性を検討するためにα係数を算出したところ、「子育てに対する負担」でα=0.81、「子育てによる自身の成長の楽しみや喜び」でα=0.79、「親としての責任感」でα=0.66と、第3因子のみ0.7を下回る結果となったが、第1因子、第2因子はともに十分な値が得られた。

IV 考 察

本研究では、保育士が親を対象に子育て支援を行う視点から、乳幼児を持つ親の子育てに対する「価値」と「態度」に焦点をあてた「子育て観尺度」を作成することを目的とした。その結果、本研究において作成した「子育て観尺

度」の総得点（平均値=67.5,標準偏差=6.9）は、ヒストグラムで分布を確認したところ正規分布であった。これは、総得点が平均値を中心に低得点から高得点の全範囲にわたっており、本研究のデータが信頼性・妥当性の検証に用いることのできる偏りのない適切なデータであることを表している。

探索的因子分析では、6つの項目の削除があったが、親の子育て観を構成する3因子が抽出された。この結果は、本研究において定義した子育て観の3つの下位概念にそれぞれ対応したのとなっている。さらに、3つの下位尺度を構成する項目が同一因子に0.4以上の因子負荷量を有し、構成概念の妥当性をある程度確保していることも示唆された。

また、「子育て観尺度」の信頼性、内的整合性の指標であるクロンバックの α 係数は、第1因子と第2因子において0.7以上、第3因子は0.66であった。本研究で作成した「子育て観尺度」などの測定方法が、信頼性を確保しているかどうかを判断するための明確な基準は存在していないが、「0.8以上であれば信頼性は高いといわれ、0.7以上では中程度の信頼性、0.7を切ると信頼性は低い」と一般的には解釈されている²¹⁾。しかしながら、第3因子の α 係数(0.66)が尺度の信頼性として低すぎるということではなく、項目数が5項目以下(4項目)であったことが比較的到低い数値になった理由として考えられる。したがって、第3因子の α 係数は低めであったが、項目数が少ないことなどを考慮すると、すべての下位尺度の内的整合性は、ある程度確認されたと考えられる。

以上の知見を整理すると、乳幼児を持つ親の子育て観を把握するための尺度として、既存の子育て観尺度にはない「価値」と「態度」を網羅した概念で構成されたことは、本研究における一定の成果といえよう。ただし、妥当性の検討において、探索的因子分析の結果のみで判断するには大きな疑問が残り不十分である。また、親の子育て観を側面的に把握するだけでは、実際の子育て支援につなげていくのは困難である。支援の対象となる子どもとその親の「家庭環

境」を捉えながら、親の子育て観にどのような影響を及ぼすのかを検証していくことが必要であろう。

本研究の課題について、第1に作成された「子育て観尺度」の信頼性と妥当性を検証することが求められる。具体的には、信頼性については、0.7未満の下位尺度も認められた。そのため、今後はさらに質問内容の表現や項目数を増やすことを検討していく必要がある。また、妥当性については近年、構成概念が妥当性そのものであり、構成概念妥当性の確かめ方が複数存在するという議論がなされている²²⁾。したがって、今後は、今回作成した子育て観尺度と既存の尺度(外的側面)との関連や確証的因子分析(構造的側面)による検討など、複数の方法で構成概念の構造を明らかにしていき、妥当性をより確実なものに発展させていく必要がある。第2に、実際の保育現場で活用しやすいような尺度に改良していくことである。これは、本研究における回収率が低かった要因にもつながると思うが、質問者や回答者の負担が大きかったことが考えられる。今後はこれらを考慮して、各因子の項目を5項目程度に精選するなど、短縮版の作成が必要となるだろう。

謝辞

本研究にあたり、アンケートにご協力いただきました保護者の方、沖縄県私立保育園連盟と各保育園の先生、皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 厚生労働統計協会. 国民の福祉と介護の動向 2013/2014. 2013; 73-5.
- 2) 内閣府. 平成25年版少子化社会白書. 25-36.
- 3) 小川博久. 「保育」の専門性. 保育学研究 2011; 49 (1): 100-10.
- 4) 友定啓子, 山口大学教育学部附属幼稚園. 保護者の成長と園. もう一つの子育て支援保護者サポートシステム. 東京: フレーベル館, 2004; 67-77.
- 5) 佐治よしこ, 佐田恵子, 梶美保, 他. 保育園児の保護者支援のあり方検討(1) - 乳児クラスの実態調査 -. 日本保育学会第63回大会発表論文集

- 2010 : 371.
- 6) 佐田恵子, 佐治よしこ, 梶美保. 保育園児の保護者支援のあり方検討(2) - 幼児クラスの実態調査 -. 日本保育学会第63回大会発表論文集 2010 : 372.
- 7) 田畑沙宇, 河邊貴子. 幼稚園における在宅育児支援の意義と課題. 日本保育学会第63回大会発表論文集. 2010 : 588.
- 8) 木村留美子. 子育て支援. 榎原洋一, 今井和子編. 今求められる質の高い乳幼児保育の実践と子育て支援. 京都 : ミネルヴァ書房, 2006 : 236-44.
- 9) 北濱雅子, 清水年志子, 廣瀬三枝子. 保育所における子育て支援の実践(1) N園保育士への調査から. 香川短期大学紀要 2011 : (39) : 9-17.
- 10) Rokeach, M. The nature of human values. New York : Free Press. 1973.
- 11) Allport, G.W. Attitudes. In C. M. Murchison (Ed.), Handbook of social psychology. Worcester, Mass. : Clark University Press. 1935 : 798-844.
- 12) 大山七穂. 価値と規範. 大坊郁夫, 安藤清志, 池田謙編. 社会心理学パースペクティブ3. 東京 : 誠信書房, 1990 : 237-62.
- 13) 中間玲子. 価値体系. 日本心理学会編. 社会心理学辞典. 東京 : 丸善, 2009 : 102-3.
- 14) 陳東, 森恵美, 望月良美, 他. 乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発 - 信頼性・妥当性の検討 -. 千葉看護学会誌 2006 : 12(2) : 76-82.
- 15) 内藤直子, 橋本有理子, 杉下知子. 0~3歳の乳幼児を持つ〈専業母親〉の子育て観尺度開発に関する研究 - CPS-M 97の妥当性・信頼性の検証 -. 日本看護科学会誌 1998 : 18(3) : 1-9.
- 16) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子, 他. 母親の育児幸福感-尺度の開発と妥当性の検討. 日本助産学会誌 2007 : 27(2) : 15-24.
- 17) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子. 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発. 日本助産学会誌 2010 : 24(2) : 261-70.
- 18) 清水嘉子. 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究. ストレス科学 2001 : 16 : 176-86.
- 19) 清水嘉子, 関水しのぶ. 母親の育児ストレス尺度 - 短縮版作成と妥当性の検討 -. 子どもの虐待とネグレクト 2010 : 12(2) : 261-70.
- 20) 内閣府世論調査ホームページ. 平成20年 社会意識に関する世論調査 社会のあり方に関する意識について. (<http://survey.gov-online.go.jp/h19/h19-shakai/index.html>) 2015.2.18.
- 21) 浦上昌則, 脇田貴文. 研究における測定. 心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方. 東京 : 東京図書, 2008 : 31-54.
- 22) Messick, S. Validity and washback in language testing. *Language Testing*, 1996 : 13 : 241-56.